俳諧十論

中

中村俊定文庫
文庫 18
175
2

第八言行論　第九変化論

第十法式論

十知

第八言行論

なほ此偖の言葉とをひとつおとなしくおこなひなる
儒仏の大乱より老荘揚墨のたとへそれら言葉の
ねうちをとなふれむなれ申ま風雅のたとへ詞を連俳の
ふありて當世上方連歌をこの人いはさ
きつに中ふ以上の人とても月雪の霧とて方を
花鳥の色にまぎれ人間て町人百姓の貫主のまとをて
二番ひの言葉とけくて表裏の男と呼あけく連歌ひ
とやらんとやいふ蓬椎の言葉にてとのれら方もなきあふ

○士農工商ノ人ハ今日平生ノ俗語平話ニテ詩哥ノ風流ニモヲトラヌ所ノアル此俳諧ヲ学フヘキニソレヲサシ置テ哥連哥ト高ブリタカルハヲロカナル人情ゾ

（くれと）茅に苍の口（ノセ）ばくらん面れやーまろん俳諧とて

い中ふ以下（下学上達ノイシニテ傳二句宗ノタトヘアリ）に風雅とひねもむと中ふ以下の言りを

て中ふ以下の人とうちひろむに何ゝをまいかくうむ

物の又紙のもし此俳諧をまく〻なられはらの月とうく

猿にゑ月の喩もあれるゑ角ておろくゑる世界のおら

ゐをてやゝ世をる俳諧くゝとゝれ〻洛陽を風雅の作やと

ゆさら武蔵を風俗のかさとれに世をまゝ書物の

媚とあつて作をとかゝねわれ弟もまく

手の塔よのちりて九重の階子とたつーそゝんやに

いろゐる情知博覧の人もを句の情とゆ人あーゆ人あ

△史記索隠俳寮云滑稽猶俳諧同書崔浩云滑稽流酒墨也轉注吐酒終日不竭言出成章詞不窮竭云〻

樞（サヽナカウラ）

へ俳諧とあくもちれと史記も俳諧とは行て格の歌口に

ゆとへくゝるを物の生ねとうくゝはをて調の次第のみれ

るとうり表れ俳諧を歌詠て尼も入るを表

すと孫よ雅俗のちくへくかくを風雅の一をしまり

宮とをとへ知の貴地よ沢草蕪や（カミ付ルギヲズレナトニヤマワノモノナリ）ちれくとと

ゆあれね耳をを陸ゑ句ゑれくも冊俗の人いちえ（コヽニヤクヘツリアハヌウリモノナリ）

ゆくをを今を国く里くに家近内下の堂とむを

ひくゝ人の拍をくねとよ柄とえいおゑ一穴ゝ怪力乱神

とかくりてを量の人をちくをゆくゆ方ゆ

の面白くを四方ゆ壁の謎をも作れくゝ去ゑ

彩子の白快うち世に俳諧の時うゐ〜く一流の人は
（アカラサマニミラフナラハ）
流とやつれく今はあさましうにつられむいと人の耳
遠き調とやとくむも世にある人は此のけうひあれと人と
そとくあくむ（きうらたつれとけうとて俳諧の明と不明
もりあき人くらとけうもあるへしそもそも俳諧は早いに
も俳諧とそとかくのとくとちくに何の詞ら古ん
何のんら新ん潔なる時とをあひて媚てよき
時とこひもちくむ是に言行のちうひと論とへきへて
町人も百姓も素内の僧も武家の侍もとのろ利用ま
ゆる取扱といひ風雅の席ちに決する俳諧とこる

全く表裡の人とふへし俗に俳諧いとかくき拙あり
ひ美ま第てあれらの不埒とりさんおとま和歌の
ま疑とけれむちくを當ま或人の名言とて談笑
此家の誠となりぬかへとくも我内の学者達に行おの
焼もゆ合をて合点とせわい俳諧まあもとのろ
人のりとと恥へし傳もそ言とたちてそれを
ちそこんとてくを品藻の名丘の詞ゆや俳諧かして
目おにありてにもてくありもおこちふへし
俳口は段ちおあへく俳り地あく言に中和以下の
はまりう言人連言のり俳ちたちて言りの考ひ

○愚謂念佛功力ハ有毒無毒ノ所以ニハアラス全ク信ノ一ニシテ非僧非俗ノ四字ハ儒佛ヲサシハサミテ自力ノ智ヲ捨テ他力ヲトウト公愚禿ノ二字モ其一ナランカ孔子ノ其智ニハ及フヘク其愚ニハ及フヘカラスモ自己ノ智ヲ捨タル取ナランカ我俳諧モ俗談平話ノ下品ヲ以テ一路トモ云ヘシ

といふあらんと語ふて親しみ裸談笑して人ひとりとして親ひあらん諸ふ仏儀の一ふしを虚実の間ふ一節とおもへて儒佛と衡(クビキ)とあらそひ遠くを近くを荘子の虚と補い近くを近くを荘子の実とおもふて下品の言行をもて下品の風雅とうちいひむとする貴(ヒ)ともて人へ云ふとをもむくそる儒家ふ重人の言語ふもやあらんは此ふよの不可思議なる事ひの仏俗い実にそなはりて一実と法然も親鸞ふ法然ふ

「愚知無知ノ童アノ自己ノ知ラステ他カラレタモタウトフノ云イシ」

て虚禿の二字をかなしみふさるを儒佛をいしたさて信ふ不二の大乗法ふるにおのくちれ

僧達を虚禿のんねをひとやのんいを芭蕉下の門人達もし殷の仏俗と中道て虚実の虚実とふすとをもてをかふるて言行のをられやいふんをかふく実と語をへくくふくを言と信をい君中や例のをふ力にやをもて天下の宗匠と蹈破(トアハ)をも仏法の二をふ和為とかをりをくをふくくて詞とやをけをふをと虚実の文盤ふをんふ仏てぬとをぬとのをふをふて言中の鄭ふくとをちをふる実と仏俗の一節と云へ況や楽天ふの詞ふり論語の言行とひふ東家の丘ふ

論語子罕篇

子曰法語之言能無從乎改之爲貴巽與之言能無說乎繹之爲貴說而不繹從而不改吾末如之何也已矣

註云法語者正言之也巽言猶婉而導之也繹尋其緒也法言人所敬憚故必從然不改則面從而已巽言無所斥忤故必說然不繹則又不足以知其微意之所在也

楊氏曰法言若孟子論行王政之類是也巽言若其論好貨好色之類是也下篇大全朱子曰如漢武帝見汲黯之直深所敬憚至帳中可其奏可謂從矣然武帝內多欲而外施仁儀豈非面從如孟子論好色好貨齊王豈不悅若不知繹則徒知古人所謂好色不知其能使內無怨女外無曠夫徒知古人所謂好貨不知其能使居者有積倉行者有裹糧也

起猶と合せざる恥の二字を例の親切にして深き例儲の論語あるはいかんやはれど例儲異與の言にしてはよろしきもむて弟子おこふはいかんい我家の まるもはをはられる如何くともとるべきあるべん

第九 變化論

おもも例儲の變化とは世法は今日のんねるして百物の不定とはもく世法あるを大いもの付を天地の變して雨ふるふひはふつるもを花とはもく秋を寒ふと ちれ小さもちるみをを人間の變して天とおして

はとあるもく父よをむおて子にもくひきはふ童蒙のもにあをひるふを小邦の變ふかあむ變化を天地のはれもるとおくろくを人のもくれも言に例儲の變化と論をくおいるる拍を古今の情をもくきもる拍を世法の變也はれるむくの例儲い姑中孩のことりて歸のもく屋ともをもれを例の儲くて雅ふくを今の例儲を姑孩の二儲をもて中に風雅の情を孤もりはて世の變くをを全く附合の法くて百朔を變を百を変るもりはれく附合の法くふを世法を附くを附合の法くふを世法を附くふをあるに

新しく附るも変ぜられず疎くて附さるも変ずして全く附るといふ拙を一人いくに二句ある人おくて七句まで及ばんれいを芭蕉流の秘伝のうせもなく新流にこれの附二方あり第一を有無トツイスルノ有ニハアラスとて附といふ和音の有へうて附くんるを第一を面よりの句の変化をとんだくして一子二言よりを題る故也次を會釈(アシラヒ)といひ次を通句(ニケク)といふ一巻いまて面て此三を変化をしたれば俳諧の表裏方とよいつれの附句よむるふ附も先として新句と事をへうて始より三句の打越をとんだるもあり次に付句のはらひ

○続て附さるも
ある附合
生涯しかく
陸も連らう
やうく扇の門と
いい化
小よこさくと
ちゝし氏神
小よ南川
こさる氏神
五年所詠よりしの
句るす紙の拙排
一体を場の変ぶ
ゝ梅の句ゝ附
方遠きやうよ変
ごもとりて変
ゝ所あ
ゝと変化
けんの中一のるあ
命

とかむ人を次に同を方にてかんあるもてなしちの新句の題句と事を一一神会のあやまりいひを改て
かゝ実に一会の先ねと論をへ出ちへ色欲を方を
ちの情要を家と先ゝ面のを方と先ゝ
故也今青を方れく捨ひれ今青うちほけて
蕉とかゝりとくやき方と先ゝ
いあやまりも一ひらを蕉のちをさんやうに
俳諧の世法ちを方人しまに世間の俳諧作を
ゝ会ね会ゝけて事ゝ打都のをいさへかり見侍何
ゝ新き作あゝけて句の尾ひれゝ見ゝ

一字の題句を初一字とれとおく句の詠るもおく句の詠
紙をるやはれよ吾妻と題句とはくもるはとと立て
七五節の一條をらあをりはて一句の題句をおく句
の作れをんをあるれをんを句の言便をんを歸りて
題句をはをへ附やはれい袁ふの詠ちも袁紙の拵も
二句の間をんゆちをとふやはをと俗諺をを連をを
て上をあをるをとをにゆりをえをにをををををを上をおをふ
いれの和寄り上下をををて一句の作ををおをををや
今をを句の詠をとをいを一句の作ををもる世をふれい
をのをを孫を妻を詠をれをもをんをををふ　ををひを

をを附をの法もはをを寄に一分の題句ををひをを
の詠ををふを詠をを附をををををををを
人偏の作をはをて士農工商のをををくれ負福の作
あり左をの詠あり半蔵の詠をを人ををををを
衣裳の摸様も分帯の格構もふ句の言ふをとん作
中作をて弾ををの接排を作ををれをくの詠
を作ををををんをを人をを寄をて一字の詠
作ををををれををふ有ふ附をを詠ををを
百韵を百句ふを一字一涙の脾胃を操をを
俗諺をををんのあををををを離附の詠

あるとやうるとは世のうつりたくに勝ゝ一切世の録
をやとしいく雲に無なて揚州ゝあるとむとゝる
おれるの花とちらんうるたて會釈とひ道向
とゝる會釈を寺越のむつうゝお時ゝ人の衣れう
涙拭らおきらのうるを喪色ゝて拭ゝふれとを除く
るやたうるを世間の後ゝ窪人あらひとゝふうも
むつうゝき時の機妻やもおゝて百翁を六七十句も
は會釈ゝて見る拭あれゝを中の損おをたまくに
妻ゝて世法の時宜もけ向ゝ俗をゝゝやうう會釈
といふおゝてとちゝゝも妻花の自由あれゝを俗諧

の地とゝ法けて一切の妻花は會釈ゝよるゝゝ道句
ゝ同然ゝふゝうゝも俗雨ゝを暖のをゝひゝう時ふ時宜
のあゝらひとゝゝ道向ゝ極く會釈ゝをゝ言に
ふゝのあををゝうゝ者ゝ一の有心階をもを
を場の損拭ゝらひく或ををゝゝ拭ゝるゝも或ゝ
ひゝるゝゝ拭ゝ嘆ゝを新詠を陽ゝの妻花をゝゝ
るゝをゝ妻ゝ會もをゝおゝくゝゝるゝもを俗
ひゝく物の玉極を色を妻ゝありて人ゝ
神ゝとの伝地ゝるゝゝゝゝおをゝく陽ゝ拭も
おゝ以ゝをゝくゝおゝる一ゝを有心階のゝをれゝて

あら附合よ
新らしき人の句のしら歌
不孝の罪を
女房よ泣

此附合ハ兎之師也人を見しかられ起情よ似て作よあると新らしの人よ字とこめて新ら毎よ入るしら新しく入て薗の子と趣向と定女房よかく句作の第よおもしと此句起情よあられ有心の附ならんへとさ附と作防ふ

此附方ハさりとはよねはよの論あり中より俳諧の事附方も
甚お甚の工夫よかゝるゝなし されはハおろかの損あれ
さて大名あれと甚たおろかなりとあんにおもはゝ
高人と趣向とはかりそ損ありてはよ思ふと句と
作られん高人ハ先はよりて思ふそれはよあり浮よ
おろかの風姿を失ひておそれ入る風流とも入る
へしされは世間の附方ハ先はよに思ふ者を楽して
わしや句作りよ高人とも思ひよらし此眼の所ハ
先ねの理窟を去りて其れもお句の味やと述
おもしにょりおもしろきと云ても先ねよりよと下手

ありて実に俳諧の明暗をおそるへし こち厭ハむかひ附と
いひお句の情を起さそといひ拍子附ハ諸路の栞して
宗因の風よ今の時分とそて色立ハ其その衆せ
すして頼政の和歌に白河の名也作りて向附とは言す
い有心附の中にかんと志るへし例の打越よ人ありて
人倫のさ由をやうなし然とも或ハあらひ或ハわけて
おもしろ損ねの面白られを附よ自他の差別とみえて
向附の法ともちゆへし お句を例の大名よ蔵金寿
ありなし あんに山寺の乞食と趣向よ作くそて麦飯
と句よ作るへし 世間は実に活め時の拍子を楽

○ヨノツネノ附方ハ附タヨリ前句ヘ附ル ヲ是ハ前句ノ外ニ思ヒカケサル老僧ヲ以テ向ヘハ附モヨノツカフ詠クミテ大名ヨリ老僧ヘ附カコトシ畢竟ハ前句ニアルコトナイコトノ差別ナリ

ちるなよ例の咲とも詠もて云ふに表解の附方と
或を仮借のこゝろ云ふ云ふ表解の附方仮借
より彼方ヘ附ることそを老僧として大名よむ人に付
向附ともいふもこれと商人も老僧もおゝ大名の扶
あゝおのを大名と勤ることの同ことなのおと
こらへ異るの詞をおの自とをあるて彼ふ有人の伝をて
へしねのを人の仮借をこれ付やゝのあるにて
赤熊のちまのむつゝ乃れいらをその大名と詠して商
と商品のりとを大名おをとをとてむ人に仮ふ
向附の傍と云人へしおの自と詠をと詠さるい大もね

○向附ハ句ヲモ二句ヲモ縮ンテ来タル時ノ用ナリ起情ハ伸テ来ル時ノ用ナリ

云ゝの用あれゝ附方ハ高市の美ふりして言に仮借の
ゆゝ不ゆゝと信を〳〵はてお句より情と起をとゝ
連座の人の変化と云ふて縮れい又句も三句もちより
て人のちゆのをやうもゝ伸れい三句も又句ものひてそこら
風景かちあゝんにそゝ人の村雨のは氣ゝ云る用中の松の
あゝちこちゝ附うん変ゝてお句の情と詠して詠を
孤ゝ化されゝやらと附ゝるれらをおのあゝちこちと
云る詞のあやと中ゝ云ゝて世ゝ化ゝ情と接ヘ云れと
いんと起情とゝ云ゝるや云れて向附を縮むはの用
ゝて起情を伸る附の用と云ヘしゝむゝゝと自大言文武

○八躰ハ其人　其場
時分　時節　時宜
天相　観相　面影
○四名ハ向附　起情
拍子　色立
○三法ハ有心　會釈
遁句
四名三法合セテ七名ト云

とたえりて響音といひ走りといひ敲声といへるこ名あり伊呂ハ
本華式に八躰の附合ありならべ十論に四名をとりて
附合のならひ十五なれとも附合ハ三体ありて七名も
八躰も三法の中にあり細にいへハ況や百韻の変
あらんかぎり附合もそれぞれ時によるべし伝へされハ連歌
も俳諧も佳名の(名タカクナルアハ)發句に傳ふべけれど發句ハ太極
の一気にして處よりおこりて實にそなはれハなり
元理もなく理屈もなくましても法もなく式もなし
畢竟正信の一字より其場をえる人とかんがへにあり
て上手の手にかかれハ論をはるに及ばれもなく俳諧

△論語
○爰ノ論語ノ意傳ニモ詩經トアリテ小子何莫學夫詩ノ意也サルハ第一ニ草木鳥獣ノ名ヲ識ルト結語ハ起語ト知ヘシ則傳ニモ蟋蟀ノ法ナリトアリ具詩可以群シテ以群ス則群而和スルナリ然レハ四民ノ情ヲ和ラクルナリ通ニ事ヘ父遠ニ事君ニ通遠ニ字ニ五倫ヲ互照セシ文ニ無用ノ用ニシテ文中ノ文ヲ称スヘシトソ爰ニ四民ト五倫ニ句ニ論語ノ與觀群怨ノ四意ヲツヾリ又第一ニ草木鳥獣ノ名ト書ルハ其中ノ一ハ多ノ字字ノ意ニシテ朱註ニ多少ノ多ノ意也[illegible]白馬[illegible]篇大有義ヲ用テ第一ノ意ニ通スヘキヤトアリ

のこまといふもの神宿にありて枕とかくむけちるもあり
ね遊山翫水に人とくの拙ふきも靈實の時ハいと
んに忘れさて我身の名を捨るも他人の理屈をたた
他人の名を理ふも我身の理屈をもちて論議に
行人をほくし取るをとくもとそに四季の花をや取
そふりて只備の法をほるべき△第一に草木鳥獣の
名をもちハ風雅をいふも風情をいはんとする其他の
んにえられさんとしれたと俳諧修行の人と其一へしほとて
其席にのぞむ時も衣食に一日の挨拶とそ其
て我を萬山の其もおさまりて流れの風雅ある

漢キウ
呉ノ 宛キワム
穀ヤコロ

附合の二法とかむるるもなりて又新十新の相法
るるかくるに例之吹合のふるり・和合の熟向之
きくるるに好きるるの仕合うてあるきいて附
の不運あんそと虚実の虚実とつくく十偏の
宛竟を言の変化ありけれども・一元の調子あれい
穀ヤコロとやくくをさるるに二法と学ふ
人の右旋左旋を而おもうて敵と敵
とれ作むるる附を氷の刃ヤイバとやくくはあるて高甲ミツカウ
ぬるるよ切キリ割るるを言うて言に二変ときるあくい
孫子文武の城不ういるに十偏を作りて勝はきい

とあるんかくくも我国の学者達を孔の孔家の
世法の附合うて虚実の変化のを世法のんる
あれい他階をんのれるあるるくを附の変
におとるるされくるや
傳曰世段を拝よ熱漏うて人天の変化と哀未
とちれるるひるる儒仏の教あるくる世代の
桟嫌をきるしきるを他階よ古今をとるる
石韻の変化のふるるを法を合のきるるる
きくくく仏の孫よ一念の変化を法作うて
九十刹セツナ那よ方きんよりも一念のきるを悪

とこそ〻る實に文章の公道と称し言に俗諺
の世法と信を作んやはさたまる〻俗諺い附と
〻るすの事要あれい事一言有ん附とつ〻く事二
事とい言次ものとつ〻る作〻を三即帰一の公理
〻て言れ〻を文章の論も〻て例の俗諺と
ゆるのといむ作て俗諺の古今と論て言新
の喻をぬるあれも外務の二を不會廣の人も
あん實に古今の俗文と論を
又我四之 「拾」 「中」 像ち〻雲や 「終」 「拾」 「終」 敬
古沈や 誡あこむれの言

作れい世れをあ〻ぬあ〻昔の諺俗のこと作く
をるけ〻る人の中へき情あ〻次をまて〻つこ
の事をこ言ゆ今の俗諺の事」とあ〻て中に
作り〻き情とぬくをれと作〻その餘情も
文章の優〻ともつる〻〻今や其ハ二と
其こと話を儒仏をこ言作〻て
律義をこ〻ると教誡とつい作〻その其中の
一とあ〻て画をこあ〻ふと風雅と〻ふ事や
風雅と教誡の論を張す事ふ書室銘をあ〻く
破愚と訂頑の質ふと雖し東西の二名の

文あり古歌をもとりて作りなせる事なり
こゝろもとなくて風雅のよろしきあるにあらんと
勸学文といひ座右銘といふ（こゝろ）馬
の文章訓よりけ論あり言ふこゝのこゝろ（こゝろ）
あれい始終の二と師資の作とをそなへて隨合
の作名の中に拾ふと色立の作文を法を

追ふ　こゝよ　　武用八雲

こゝに指南の針とて行くべきる
此句を擅林の名にいとおて例と言語の拾ふ
俗を拾のおもうけられ今の俳諧の姿も似れ

いこれ〳〵に弼の美ふとき〳〵しく拾ふそなへ其姿
と云ふる〳〵〳〵〳〵

知るあるまゝにまゝあるて尺〳〵

あるふちるもく白河の　関

此言を頼政の和歌言うて今く俳諧の言を
つるあるゝ彼ら陸奥の方里の情を添ひ
白河よこゝ色の姿とかるかり遠近の用不用
ありて姿拾の作ふ白ひの名おるに今もなれの
此法あり〳〵やらんこゝ世に新古いふのあるを
もとへてなすそとり古法とそるまいか拾ふて

はゆるとうとうとしてハ一世の連句俳諧ゝゝのゝゝをもつゝけてその古今をもつゝけぬハ何やら寂しきやうなりなれらて同意とし等れともいろいろ和事の類詩ゝけ方の論あり書れたゝのハ景を俳諧ゝゝ色のゝんをもていひく遊句の中ハ一躰とあるとり盡なりハ名の文法を始ゝ起情と向附とハ於て中ゝとを拵さと色ゝと両句の對とをもつゝ孤ゝ句の中ゝ[門ノ中ヒラノコトクナラブベ]ゝとの二ゝとを和俗をしてそゝを陽句の鏑線[カツ句ヘタテ・ツイミスル心]双関の法も倒[エラ下ニ上ヲ下ニ上ニスル心]おゝの格も句談[トウ]の長短も路路の新拵もゝをもて此向ゝ知へきも盡かりふ片段の不可思議

○俳諧大略虚ヲトリテ実ハトラヌニ似タレ共発句ハ眼前ノ姿ヲ其ニイヘハ無心ノ実ニシテ虚実ノ実ナリ然レハ発句ノ実情ヲ又ヌヘシ俳句ハ前句ノ実ヲ虚ニスル働ヲキアレハ有心ノ虚ニシテ虚実ノ虚也

十論ノ信偽モ虚カヨキニモアシキニモ実カヨキニモアシキニモアラサルカ

いま一の発句ゝを拵とけけをゝゝのゝとけゝ編ゝゝとをもゝ実ゝ俗諧の虚実をもちゝゝ実に十編の信偽をもちゝんや況や論語の行孫とひゝてゝ民とゝ又偏の三句をゝて真観拝怨[エン]の高をもちゝ書ゝんちゝゝを[門]馬の文章訓ゝ怨の一ゝより通遠[ジ]の二ゝを纂ゝて景竟ゝを鳥獸艸木の用あんとゝるゝ実に才一の詞をゝて礒碎[シツ]の法もそゝたゝゝて俗ゝの口訣ゝを実にゝゝゝゝ一ゝ弾ゝゝ片段の景竟をゝ要ゝ方代も朝[ゴ]をゝゝゝゝ大ゝゝを有心附のゝゝあゝてゝたゝゝ

こい花鳥も新しく花屋におつれの文毋も右らん
新古を今日の妻化して作花の傳ようるき
色をもつて俳諧の五事と兵家の刀法とへ
うる世あり又男谷ろ一世と伝ふるも新家の
ふ段を覚東あるさ不あ〜む言に氷又の一句
そして世に論を有破をいろ花〜花屋さを
世性の和とあつうひ虚実の二論を人ふ北変
とちをふて俳諧を〜ちを〜ちの遊あれをと
涅槃の一字不説ふ〜ふも花論いを〜賦ね
のうあ〜ふ〜

第十法式論

おも俳諧の法式を連ふの家にんあ〜ひ〜ふ和
遠陀のさ〜合も仲本鳥歌の書き〜ひも一花
一句の和を二句とちふあ七句ちふ和を又句とあ
又句ちふ和を三句とあ〜二句の式を二句ふ一句
ふを句きりやふ。重典の掟もふをおをたう
あ〜んふとおひひ法をやをふんすとふふをやを
一中をを平俳のをうひふふ韵ふのひ衣刹ふ
一部の式を百韵ふ書ふ〜俳諧のは式

身性の佛筆より燈に茶とつれ囑中に種を
ひろひくもてすと今もそえるちかおほれとそ
いにもゆるくれもそるを万法のおもあむ
をやいくや・春句の切字より眼の韵字のも才之の
よ余はも哉と来とこの和訓をつむ様と文をとも
を題をいるむ指合を何のかちちや去嫌を何のか
ちちや四季八月を何ちちん我を四季をはてあれ
も俳諧を何のあるあるとは求めるをいは
をてもかとらふをとをちかをのとらふ立を下に
まくくちふ論語を夫詩のをくくも孔父のたをら

○多識ノ二字ハ第一ノ意ニシテナ路カ門下ノギゴワナルヲコラテ詩ヲ学ナラ先ヲ草ニ花鳥ノ名ヲ覚ヘオテ詩文章ヲモ書ヨホヘテヒロク学ヲ向ヲセヨト詞ノ先後トハ小子何ノ莫学ヲ夫詩ノ章ハ文ニ先後ノ法ニシテ艸木鳥獸ノ名ヲシルトム結語ヲ其章ノ起語トシレトナリ

うて獸木のをとれとうるる多識の三字とゆうてや
詞の先ねとかひとへいかうふねとのとをりあむ
遠くを儒佛の学を向をも近くを法をの義をあも
博くをのをてをるをもをれをいををんを
かへをれを耳をを耳ををゆををへをりをにをるのを
をもをあるくををれを也況や俳諧ハをおををして
我をを知ををひあをを何のかをも何のかをも我を
をるをを一人をあ一学をれををを・し費をとをん
ををへをを方をもを文をにををる書物あをハ一種の
二おををれををもをんをを法式のかををををれを

宵晋二月ノ字ノ說ト哥仙ハ二巻二月モ可然ト云ル祖翁ノ遺訓アリ未ノ傳ト為矢杪ニ互見入ヘシ

三人を例の新はいろうれ〳〵三人連句の三句ちがへれ傾城猿楽の婿とあり て俳諧をいふもかゝるもまさ〳〵むけれる 貞享 求るを宗匠のたゝと判者の法と新式の二條よりうらく執筆のたゝと一條とあり 立そのたゝあり連句のたゝあり又條い例のゝるとあるこゝ句 宗匠のゝるゝふを第一にたゝ人はをんをけて我句をくとあるをへうに人い宗匠の新をんく作ゝり調ゝと先ゝるもあきも風雅の運ゝれいそのの俳諧の新と称とかむゝふ作くくの附句あんに第一を附んのをれうたあう

をけをけて附句の新句と称をへくお句のゝるを新すに第二をを句の新をゝりゝを句のをれを論をあ

四折の変化を分論のゝやかゝ第句の面白ふあゝまれ句作のあゝおを宗匠より去をへく新句のゝゝあを作をへ匠をへ一指合のゝを俳諧の役あれいを宗匠のゝをたゝのやをへゝたをたゝのゝをもたゝ求ゝを云れゝ俳諧をれと表裏とゝる俳諧を新式あるゝ一座の新品とゝあるゝゝて宗匠のゝあゝを俳諧の月花のあゝゝり二事にをゝをゝる彼岸の新

もて手にとるべきものなり。句ごとに、句ごとに、
ある和あり。附句にすれば雑とある和あり。詞のこと、名
も物のたぐいもいもせ。時よりもくらいを人よりてもるる
やうりとうるもいう。新式のかけるとたをなふ
時あり。古式のかくれたるとをもるはあり。これらと
おなじやけの私といひくもきにそしされ人も感とた
を和とおもへるれい人も信あり。ちをけ理と生ま
ちをこてを求とねよりあひふをけ。ちを字匠の
ふをとよひたをーを。これに古人の詞あり。君よも重く
これに感あるに感あり。ちれに信あり。とをとをあい

○感アラサレハ信ナシト
イヘル文ノ出所未ス詳

論語學而篇子曰君子不重則不威學則不固主忠信無友不如己者過則勿憚改
游氏曰君子之道以威重爲質而學以成之學之道必以忠信爲主而以勝己者輔之

義とあるゝにかなをを信の一まとり入れい例あれ
有性の例ようちんちれと例のおりことより実言
ををて人とをちいるむに例の一節とをちんをを
古人の詞のゆをいもあるむ例よ判者のををといふを
宗匠の一體ふをんをゝ釈内よ例と言葉とのこをき
三十二應の自在をわくを世法とあつふよ分ふあんちれい
ちをこの勝劣レツをむゝをりまるの射よあれて連俳
い賭物カケとあゝをふ例もあれいをと抜ををも判者に
あり点料ナトノムイと答ををも判者よあり況や在弱の点式
をを長点の法あり圏点の格あり秀逸の格を

例の意なれい弊も判官の妻くいふべき才覚
判官のんわを仇諸一人の弊といふのとまる
なりもてよむふはを宗近の附合と中と弾に
指合と宗右の役あれと同とあるはいふる命
作て一人の弊といふを判官のんの好不を拵く例と
南向のもあれあつまると附合のもくいの俗歌と
てい宗とへんとつもとも一人加つると勧懲の法
ありいそたと一なの宗を動うて一国一城の人と
あひけ あてもあてもひとりて一おにもくんを判官の癖
とまふへい判官ちそ癖と化猫をにけて墨を

其八堂のお詞とありもむにけれと点者の額うらて
價とまれ人を此論に及ぶてもも判官の宗近と
もてれく世法とあつふ夫ずとを世界の俳諧の
ちあとい判官のんのうそくもれもとこらかく
いひかくあれいとありてうむ不の法くうあ拵り
元堂の俳諧とやとをいおの中に文のんありて
例の雑不とあへ戻りて俳諧をとそもかて
もあれとまといのたもれのあるうにとは沙
元祝にてかるうとそはそて自己の眼とひおて
判官の虚実と着ひ破をむ言と殿書うを事の

〇難波の辨—日本武ノ尊難波山ヲコヘタモフトキ詠ル人やうぐひすめくいくあう祓つるトノタミラ二酒折ノ神ノ付ケタミラ句ニハ九日夜ニハ十日と
〇八雲の—素盞嗚尊ノ御ウタ二八雲立川出雲八重垣はよこ…まゝ八重かきはくるもの八重垣と

眄睞(メンレン)といひ祖録なんどに疑一決といへりこれらを
儒御の内読にして下息のくまなりとはいへども教化
の人此大秘にてありけれやむかし此俳諧を俳言と称
といふ判ありて世を例の輕にとなしくして連歌噺
の躰具すもいひ捨られいさる眼もなしもとへるれと今や
我門の俳諧をる俳諧のかといふ物なあれと俳諧の
詞といふ物をあしからふへ難波の辨をたくし八雲の
詞とかなるとも連哥と俳諧の沙汰をみおかり此なを
我家の張叢なる雅言のなやりては俳諧の旅るしとも
俳諧の花をこそ俳諧よあるもそともおこの真様と

カナト真名ノハリ
隨ひひ辶水のる
辶水ノツ、キヤスラカナラス
隨ひひ辶ひ名の為ト
意ノ心ノ字ヲ加フヘシ
カナトカナノハリ
ウフ々通用ノ7

あるけると新式よなるの傍(ホウ)訓なり文よ雅言といひ
俗語といひとちらも俳諧の公用なるにやあやりといふ
ととられら病ひとなたこれらは俳諧の内にと杰甚しく
律や世の中の善言も悪言も口あるものになりぬと
それよ●病の有無をとくる式目の委細と称せはらんや
世よおさく俳諧にくきく人の上あるて●十国十色あるへ
俳諧をもすることやるそれからありとそるおそれらい故にの
人よして此中の論をあつらしに決よ執るにのくらいとしゐ
宗匠の揆要とよくそろひ連衆の洞よりと失からて
假名と真名とも配と口傳おほしてきりと論畫の

ままれありともよけれひとやくちきんなれと才一の
ふかしてふ一しの例よ指会と去嫌をかしの概要の
役まれる人の陪さるいおよりあうん拙いうまへ一
けて指会のあるけいう事近の話とうくく藉こうす
とりへきもこう場こう人の句よりてもに作さ至す
もあんなれも世話のの人和ふ一社のれ節とまきん
うを公私のけひよるとあやまへ一宮よ此法のね
と論とい指会とふうをはのすも新路の指よの
あきねに去嫌とふを象物の新も字本鳥獣の
ちかんを一まの要のあおねに新筆よこれの

ねとまねいけよあやまへのあむけて一次と文かに
あきく脇句をかしひ接かへ一次身に作者の名
とよむうをを句を行へ此句を行へと宗近よ
新とまへ新へきみるやれへ此句を行へと宗近よ
ねとよまねやをを色て此類を諸抄よ番それを
我まりねを世とかてきて書といいむとこれ
とるよきはるとまるけを法よけねとまれとも次よ
事きれねとふを勝ふの花をよを此りを宗和の次第
と挨拶のへよまへきて おれと宗近よ通をれ新と
新ととんねるやけれを我宗かの面通言にあるを茶

近来老師ノ掟ニ
俳席饗食ノ恵

一汁一菜を多くはさるハ倹約とおもはるゝとあるいかにも此容の人それ是しんとあるしの御しきの縁ふかんと浅くりての掟といはんか

ごゝ嗜みてねらしめて俳諧の意味とすへし是をあるはよね着の戯あるハ論語の精(シラケ)なるといひまはりて名をはしてそれを例の法かしこも流れて厭りて上志ハやかなる文章の優なるをおもて談にて云に雅俗のはりひとをしへハ成る文質の論とも志らん流て新式の饗礼にこそ席を一汁二菜にるともて茶とたんとよかゝるあるわうらの吳服地に氣ともにまて辛なもの掊構にするをへし酒を二献によるをへしりとも謀や茶人の時なよりも俳諧の供給をたするとおそまはぬを待こよにも届　待つく何く時ハ盛膳

よおきそるやさはん知しも辛さものゝ名ありかく饗應の類らんとあそさくよ倹約の心よいあらに例の稀なもしに例の流行しるらん云なあるとまつる今世に客発句とつひ言ても脇とうる流もしはへるそよへしに発句を客の位よ似く云を流ゆきもおわつて詞のふしんをあまし脇を亭主の席よ似くこもんあおからに発句の全体を調ふる放也脇の新字も叶游法よ志るへし世すかく名残の花を詠して句の即とさすあり此名ハ俳諧の儀式をたちて奉納追善のをくひるを発句の作者へも花をとらむへし若と

孫とにそんをあらはすと句をとゝのへもゝ
ゝ座とゝゝのんねらを拠所とゝ拠の表ゝゝて
雲一座と呼る時とゝ座ゝゝゝりゝ巻とゝるゝむ面
花とに一座と称あゝゝるゝゝ席ゝ巻句ゝゝはね
あゝれゝ或ゝ一座の花人ゝ或ゝ一家の友ある人ゝ
ゝゝの時とゝとゝあゝゝゝて巻の法よに巻句ゝゝむ
一一かゝて湖座の再ゝゝゝゝみゝ句ゝゝゝゝかゝはゝ
句の花ゝり巻句ゝゝけて押返一ゝゝゝむゝ
ゝゝの儀式をゝる童ゝゝゝゝんゝゝゝゝの友ゝ法ゝゝ
論をゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝ巻ゝ一ゝ連ゝの

ゝゝゝゝを例ゝ衣食の様嫌とゝゝゝゝゝゝゝ席の
時ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ一座と例ゝる時ゝゝ取次ゝゝゝゝ句ゝ発ゝゝ
連座のゝゝゝ感儀ゝゝ面ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ懐紙のゝゝゝゝゝ面ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

毋一家匠もとのつゝゆきちなむ一向一直とも出家遠近とも世部を古求よ五條あり（ヲクヒハナヲヒクヒ）て今たゝ義
ゝ記さるを及ばてを毋て俗諦の席を倫を才一
世情の人和をそあるへて論議ゝ温厚の妻とおもへ
才二を詼笑の風俗あるへく関雎ゝ哀乎の頌
とまれや俗諦をそもれの俗情ゝくよあし
おも一時の妻あんかをくも和内の俗諦師ゝ俗諦を
俗諦のゝあゝ。あゝた俗諦をもも何のゝ
法求をもも何のゝ名ちるやゝきゝとあるも世
論とゝうめて毋話の中の風と雅とゝゝ

も世間も今日の戯ゝて廉ゝをとのつゝ風毋の
変ゝかあひ浄ゝ世情をゝ花鳥の和ゝあんん
毋人をゝ俗諦をゝ俗諦をゝ鳥毋の子
とゝゝ世ゝも和漢ゝ清秘自在のゝ
傳世篇を全く我家のゝ俗内の求も
かゝれゝ毋書世抑ゝ今あれゝ大ゝ川童部も
ゝゝゝ毋ゝ毋ゝ毋ゝの二を添ゝて毋ゝ
何のゝ名ちるやゝ求を何のゝ名ちるやゝ法求の
所謂（イハル）とゝ毋ゝ毋ゝを貞享の式目とゝ
て五條のゝねとゝゝ毋ゝ匠のゝねゝ

一社の説とつたふるも日にそ協の機特あれとも
いとおよそ変せて〳〵こそ見えたるよ通すへし

青園をあるゝ神の文ゝ作

わらう萩の　風おもてもさらす

此句を亭祖の神折して月秋の七句目ちるに青
園と月の附かゝれ萩と神風の感実とあ
らふ志れい主次の詩よむつゝきと例と遷変の
青園を大の広月乱と含られて変ゝた
月とつふ子ちをもつて
八月を旅おりろよ　小幅弾

小ブロセキ也傳受コナリ内秘

ゝ作ゝを一社のゝ答ありとても此よ作ゝ
我内の太廉生ゝをゝられのゝて北青園ゝも月と
おもゝらはゝもあれ変ゝと字匠のゝあとゝ
ゝりけれと一社の説ゝをおゝはくの傳目を
おゝゝ金て公私の二子に搭据ゝ変に一大の
霊実とゝはゝんや蓋おゝふけ段と風雅の運とふ
詞を神馬と祖ゝの常語ゝるゝゝるゝ薫内の
家訓ゝるの冥加ゝいひる運とゝる風雅の詞
の須便ゝ〳〵俳諧ゝ例の対勝ゝとふへ
須と執筆のゝるゝて假名ゝ真名との配ゝる

但けるを古法とあるに東華式の文格より新家
の書法とをあつねる連音をおほく假名と
もらいて仮借をおほく真名ともちゆれども
と真名との別さありて上下の連接のかねがね
はありそをいへば古泥や硯をひの迅れのをのとき
泥水の法をき法あるに硯をこも水の言とを
分論をして真名をかねあるもあれを
を時をへおのをび水の言とを用のむのまとかふ
れをふをて大和の風俗をて假名と假名との配
ウブの通用ををるへきもけのにフヒへの音韵も

イキシクの四言横七芭蕉門の假名遣をて真事
式の一條とあをる例の口伝をけれもむしより
拙の法式ををたをを別をて時をををををる
あり古伝のあやをを用ゆるあり何の法も
をれあるありをれを故実の法とをれら例の
所をををいをををををけれ実の一法
ををん蓋や才二の條用に仮借の臺ををををい
をを教化の大秘法をて傳門ををを孫言をい
を家ををを富言をを況や仏書の唐実
自在ををををを余ををををを方便該やを

○俳諧ノ黨ヨリ云トハスト
イヘル判者ノ虚実ヲ着
破ヒハ予ガ其虚ハニド
ハセテサトラスル無用ノ
用トスヿヲシラン

に指月の喩とあらハ言に俳諧の用と世用とを
わかん書や才之の條目に一えのれ節とふすれ
おに人和の温厲ありて今とて公私の二ツをかね
て法の私曲といひすゝめる言に十論の公道とおなし
言に十論の公法とそのほかんやこれらと百世の
五條目とあるへしおいてなお我門の文道を万世の
二篇ハ言をおもしき法式の一篇ハ一徳をたのしみ
そよし虚実の動りして諸人これらの要なとをさへ
けれ十論ハ息自然を通してけしきて俳諧の名やと
よりれてハ天下に横説竪説をして一しるえよ儒門

の正教としても忠信の教ハ諸道の法なりとて孔子の
道も文行の学にありかくてこれの善悪をとられハ
二家の言は此をおれるへしいふも所なおれくも
おきる一ツとを俳諧の元の手法うして容易の
人のなしやすふへきとや
おもく十論の次第よりなれる要文を得さる
才一を俳諧と誹諧とにありて古今の善悪ある
より俳諧を儒仏とやうけて今も許多の場
とひ才二を定ねのさのことにとる其六一ハ
俳諧の理即をあり其六二ハ俳諧の虚実言えをあらん

オ三段ニ区別シテ詩文連句ノミカヽシ
と云れさるゝゆゑ詩ハ連句ハ詩文連句
の性ニ及ぼすとも用ヒなくに俳諧ニ
命じ来て詩ハ連句に善悪のことを
ゝけそゝんいろゝ世ハと伝ハくて法家の理論
を推ハんやまゝに和の區屬ハいひ法家の
一節とそる意と我家の風骨うて醋吸の
ニ要も熟の要文をゝんそのハ俳諧の代式
とあゝ文章の法格とおらゝもるに或ハ上よ
のトよ所ゝトよに仙ましゝる意に

○アシラフトハ推言ノヌメリナリヲモクロヒトハ俗語ノイヤシナリ 仇類ナリ

六義の心極とする一ク求ハ言語ニ拘ラヽ
詞のあやに病とゆゝ意に俳諧の技巧と
ゝゝ沒やゝ中おゝ以下のゆゝ俳諧の一ハと
加ハるゝとゝ信とハんやハとゝて
ゝ有とゝのハハんやゝ命ゝて今日の理と依
世ハとハくさハとゝ詩ハ論
の新向ゝてゝを始ゝ教ゝて儒仏の両道と
俳文ゝいおて詩ゝ功のニハゝ功とあゝゝるゝれ
とゝ俳諧の論語ゝもいゝとゝ俳諧の法語も
いつひ体を述の一ゝより霧ゝ花鳥ゝ比ゝ

いさぎよ八十論の章義とつゝ論とも付いそ人と
とゝへ神とまゝ口付いそくゝあそくるれよ
に春秋の歌息も口訣達ゝに摺巴の蓋は口訣
「コノ両口訣ハ爲講ニヨリ見合セ知ルベシ」
そ家くくの秘訣ゝてあゝ十條は要文もに
今いふ一條ゝ仮借とたくゝて論の中は大要文
ときゝゝ命ゝ元ゝゝや論語の百八十章も
始そ字の一字ゝ撰ゝ詩の一字ゝて詩ときゝ
されい人ときゝれゝ萬古不易の大ゝと拵ゝゝ
そ言ゝゝ論ゝ論語ゝゝ論語ゝゝ仮借も
仮借ゝゝゝ庵言ゝゝ庵と言れい釈老

とゝゝそ実と論ゝれい孔ゝ老ゝゝ文に論語
のゝゝもゝゝ一ゝれの言語ゝ庵言ゝゝゝん
いれの庵実ゝ先ねゝゝゝゝんはゝ変化の
槲ヤチゝゝゝゝ君ゝゝゝ仰書の文百四十
拾ゝ論あれい論ゝ律ゝゝゝゝ言ゝゝゝゝ
ゝゝゝ一言の教ゝゝゝゝゝれゝ儒伝の
大ゝゝ河難四事のそ言はゝゝゝ有者曾参
のゝ語ゝいゝゝゝてゝゝ文章の表言と不表言
ゝゝあれゝ迂詐ゝ真言ゝ論ゝゝ及ばゝて
和漢の凡雅と仰ゝゝ遠くゝゝ浦のゝ百篇も

冒頭の二言をもて世とおもひ近くを奇書の
八代集も浮橋の調とそれ〳〵てよ所以の
ゆゑなるべきやは論の法者として
空に論者の大功と任をの傳ひ木鐸の喩を
もつて例し仏諸のおしへを仏家の龍樹
も菩薩のゐとやめあく世尊の論師とあれ
ちらし

深澤